

《国内展望》

なお息づく日本の心 目頭を熱くさせた大和撫子の義拳

(2013年10月4日)

踏切で倒れている高齢者を助けようとした女性が電車に轢かれ死亡した。現場には多くの人が花を供え、手を合わせ、涙を流

し嗚咽する人も見られたという。日本中が感動した女性の行動を改めて見てみよう。

事故現場

事件は10月1日午前11時半ころに発生した。

現場は横浜市緑区中山町。JR横浜線の鴨居～中山間の踏切。父親が運転する車の助手席に、娘で会社員の村田奈津恵さん（40歳）が乗り、踏切の前で遮断機が上がるのを待っていた。

そのとき、踏切の中で横たわっている男性の姿が奈津恵さんの目に飛び込んできた。

「轢かれちゃう」

こういつて奈津恵さんは車から飛び出し、踏切内に入った。父親の「やめろ」という叫び声が奈津恵さんの耳に届いたかどうか……。

奈津恵さんは「だれか、非常ボタンを押してください」といいながら男性に駆け寄り、その体を引きずり動かした。そこに東神奈川発、橋本行き普通電車が進入した。

踏切の線路内で倒れていたのは74歳の男性で、鎖骨を折るなどの重傷を負ったが生命には別条がない。本人は歩いていたことは覚えているが、気がついたときは救急車の中だったという。踏切内で貧血を起こしたなどの事態に陥り、失神したと考えられる。

横浜緑署によると、奈津恵さんは男性の体を踏切外の砂利敷き部分に動かし、レールとレールの上に押し込んだようだ。男性が押し込まれた砂利敷き部分と電車の車両底部との間隔は約35cmで、電車が男性の上を通過しても、この空間があったから助かったのだ。緑署の幹部は、「村田（奈津恵）さんの機転で助かった可能性が高い」と話している。

危機が迫るなか、じつに冷静沈着で的確な助命行動をとったのだ。自分の生命のことを考えずに。

無言の帰宅

「痛かったね」

事故から一夜明けた2日朝、母親は深い悲しみのなか、娘の遺体と向き合った。

車を運転し、事故を目の当たりに目撃した父親の恵弘（しげひろ）さんは、

「お父さんより先に逝ってほしくなかった。これだけです。それ以外にありません」

さらに男性の親族から弔問の申し出があったことには、「どうぞあまりお気をつかわないように」「強いていえば、そのおじいさんは奈津恵の分まで長生きしてほしい」と、言葉少なに語る。

母の春子さんは、

「昔から正義感の強い子でした。その性格は私たちが育てたのではなく、娘が生まれ持ったものだと思います。事故で助かった方は、娘のことをあまり気にしないでいただきたい。多くの方に献花していただき、本当に感謝しています」と涙ながらに話す。

その行動の意味

人はだれでも行動を起こすとき、何か考える。時間が許す限り考えるし、またわずかな時間しかないときは、短い瞬間にいろいろな判断を行う。

たとえば、自分がやるべきことか否か。どれくらいの労力や費用がかかって、どれくらいの見返りがあるか。やったら他人から賞賛されるか、あるいは非難されることはないか。失敗したら恥をかくのではないかなど。

起こすべき行動が、生命にかかわる場合には、どうだろうか。

そんな場合でも人は、同じように考える。

さらにその後、テレビカメラが回るなか、母親は助けられた男のことを気遣ってか、またこんな言葉を口にした。

「(助かった男性は)精神的にきついと思う。その心もフォローしてあげてほしい」

お父さん、お母さん。奈津恵さんは間違いなくあなたたちのお子さんです。あなたたちが胸を張って誇れるお子さんです。周囲に心配りのできるあなた方のDNAを受け継ぎ、あなた方の生きざまが奈津恵さんの体の中にしみ込んでいた。ほんとうに素晴らしい心の持ち主であり、同じ日本人として私たちも誇りに思います。

奈津恵さんの親戚の方は、次のように語っている。

「見て見ぬふりがだんだん世の中に増えちゃって、さびしいんですけど、あの子はそういう子じゃなかった」

どこかで損得勘定が働いてしまう。

では今回の村田奈津恵さんの場合はどうだっただろうか。彼女には、考えるわずかな時間もなかった。

遮断機が下り、警報が鳴っている踏切の中で男の人が倒れている！

それを見た瞬間、彼女はシートベルトを外し、ドアを開けて飛び出す。「だれか、非常ボタンを押してください」と周囲に叫びながら遮断機をくぐり、男性の許に駆けつける。意識を失っている男の体を必死で引きずる。予想以上に重かったのだろう。

電車が迫る。

男と奈津恵さん、二人の生命が危険な状態に陥っていることは十分わかっていた。その最後の瞬間、奈津恵さんは男の体をレールの隙間に押し込んだ。

「すごい勇気だなと思います。なんとも言葉がないです」

事件の翌日、現場に献花に訪れた男性はこう語る。

しかしこれは勇気だけの問題ではない。多くの方は、まず、頭で考えてしまうのではないだろうか。

——男の人が倒れている。遮断機が下りて、警報が鳴っていて、電車が近づいて——

その一瞬のためらいは、立ちすくむように体をこわばらせ、車から飛び出すどころか、シートベルトを外すことすらできないだろう。

東ニ病氣ノコドモアレバ

かつて311 東北大震災の折り、南三陸町の防災対策庁舎で、津波に呑み込まれるまで住民に避難を呼び続けた町職員の遠藤未希さんのことを、私たちは忘れることができない。彼女は文字通り、自分の生命を賭して住民を守りぬこうとした。

あるいは最近では、電車とホームの間に挟まれた女性を救おうと、ホームや車内にいた乗客など40人が力を合わせて32トンもある車両を押し、隙間を広げ、無事に女性を助け出した美談があった。

村田奈津恵さんの命を捨てた行動も含め、こうした義挙は、日ごろからの生活態度ができていない人間には生み出せない。

「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病

明らかに日ごろから危機に即応できる心を持っていた女性だったのだ。

「まさかと思った。でも、どこか理解もできた。困った人がいれば、自分ができることをしようと、自己犠牲があるような娘だった」

事件のことを聞いた直後の母親の感想だ。

奈津恵さんは控えめな性格だが、面倒見がよく、酔った高齢者などが道端に倒れていると、介抱して住所や名前を聞き、家族に連絡したこともしばしばあったという。

失われた20年という言葉で表わされる平成不況の中、人心は荒廃し、多くがいきり立ちギスギスしている。刺々しい日常の中、それでもなお奈津恵さんのような「自己犠牲の精神」を持つ女性が存在した。

シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ東ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイトイヒ

北ニケンクワヤソショウガアレバ ツマラナイカラヤメロイトイヒ」

(宮澤賢治『雨ニモマケズ』より)

村田奈津恵さんと中学校時代に同級生だったという女性がテレビの取材にこう語っていた。

「(奈津恵さんは) いつも笑顔で、優しさが表情ににじみ出ていました」

いつも笑顔を見せる優しさの中に、本気で生きている人間の素晴らしさがある。本

気で生きているから、いつでもためらうことなく行動できる。

その同級生はこうも語っていた。

素直に義挙を褒め讃える

今回の JR 横浜線踏切事故について、残念なところはいくつかある。その第一は、町の人たちが倒れた男性に声をかけていたか否かだ。

日本はいま高齢化社会が進んでいる。町を歩いても、買い物に出かけても、観光地でも、お年寄りが多し。そんなお年寄りたち同士があいさつを交わし、声をかけあっていたら、踏切の途中で倒れる以前に、何らかの異常が察知された可能性が高い。

もう一つは、町を、あるいは村を、市を愛する気持ちだ。自分が住み、生活している町や村を心から愛していれば、その地で起きる犯罪を憎む。その地で起きる対立や喧嘩、いさかいを憎む。その地で事件が起きないように、みんなが目を配る。

「あの子ども、大丈夫かな」「あのお年寄り、交差点を無事に渡るかな」

みんなの目が隅々まで届くのは、住民から愛されている地域なのだ。

そうした反省すべきところはあるかもしれない。しかしそれは村田奈津恵さんの義挙を傷つけるものではない。

「自分が同じ立場にいたら助けに行けたかと考えてしまう。本当に、残念です」

奈津恵さんの美談は、マスコミや警察が意図的に熱を籠めて作り上げた物語ではない。

人を思う優しく強く美しい女性が生きた、ほんとうの美談である。

事故の翌日、2日には事故現場に献花台が設けられた。そこには早朝から深夜まで献花をする人が続き、途切れることがなかった。

「自分だったらこのような行動はできないと思います」

「(村田奈津恵さんと)面識はないが、せめてもの思いで、献花だけでもと思って来た」

「ここを通るたびに忘れないで、私も人の役に立てる人間になりたい」

日本にまだ、村田奈津恵さんのような女性がいた。

村田さんの行動は、私たちの胸を打ち、その死は目頭を熱くする。

いま私たちは奈津恵さんに向かって深く頭を下げ、感謝の言葉を捧げたい。

「ありがとうございます」 ■